聖霊降臨後 20 主日（特定 23）Ｂ年　　聖餐式・説教　　2015 年 10 月 11 日

主よ　わが岩よ　わがあがない主よ　わが口のことば　わがこころの思いを
み心にかなわしめたまえ　アーメン。

今日は、今読まれました福音書、マルコによる福音書 10 章 17 節からの物語「金持ちの男」を皆さんと一緒に考えていきたいと思います。
皆さまご承知のように福音書は、イエスがなさったことや、それに対して弟子たちがどのように反応したか等が、現代のような印刷技術がありませんでしたので、人から人へと語り伝えられたものであります。それも、伝えられたものの中から忘れることのできない興味ある出来事だけが選別され残されていました。その残されたものの中から福音記者が必要だと思い、選び出し、編集し、一つの書物として書き上げられたものが福音書であります。口伝ですから聞いた者が感動したり、おかしいと思ったり、印象に残ったものだけが残されているのであります。強く心に残ったものだけが残され、そうでないものは忘れ去られているのであります。ですから、わたしたちが福音書を読み、こんなはずはない、このことは矛盾している、なぜこんな言葉が使われているのか、と心に引っかかるところは初代教会の人びとも同じように気になり、残されていったと考えられます。そうしますと、現在わたしたちが聖書を読みまして、何故、どうしてと疑問に思うところがありますと、そこにその物語の真理が隠されていると考えることができるのであります。
今回、説教準備のために何度か今日の福音書の箇所を読み返し、黙想しました。すると、何故このことが、このような形で書かれているのか、と気にかかる個所が数か所ありました。例えば、何故金持ちでなければならないのかということです。どうしても金持ちでないといけないとするならば、ぎりぎりの生活をするお金ぐらいは持っていますが、決して金持ちの分野ではない私ですから、この物語は私には関係がない物語と考えることもできるのであります。
しかし、17 節に「ある人が」イエスのところに「走り寄って」やってきて、イエスに質問をすることによってこの物語は始まっています。質問したのは、何故「金持ち」ではなく「ある人」なのでしょう。「ある人」でなくて、「金持ち」が「走り寄ってきて」イエスに尋ねた、と書かれてもいいわけです。しかし、あえて、マルコは「ある人」としています。何故なのでしょう、それはこの物語が「ある人の」物語だからです。「ある人」がたまたま金持ちであった、ということになるのです。そうしますと、この物語は特定の人の物語ではなく、すべての人への物語であると考えるべきだと思われるのであります。
もう一つは、金持ちの男がイエスに「私はあなたがおっしゃる律法を子ども

の時から守ってきました」と反論します。すると、イエスは「あなたに欠けているものが一つある。持っているものを売り払い、貧しい人に施しなさい」と語りかけます。そのイエスのことばには責めや批判はありません。聖書では「イエスは彼を見つめ、いつくしんで言われた」とあります。「慈しんで」と訳されていますギリシャ語は「アガパオー」でありまして、無条件に受け入れ愛するという神の愛＝「アガペー」から変化された言葉であります。そこにはイエスの愛のまなざしがあるのです。イエスは金持ちをいましめてはいません、受け入れているのです。イエスが金持ちを受け入れながら、どうしても言いたかったことは「確かに、あなたはあなたの努力や善い行いで人よりも多くのものを獲得し、金持ちになったかもしれません。しかし＜永遠の命＝救い＞というものは努力や行いで獲得するものではないのです。永遠の命は神からいただくものであり、神のものなのです」とさとしているようです。

黙想で考えましたことは、永遠の命は特定の人（善い行いをし、努力をした人）に与えられるものではなく、神がすべての人に心を込めて用意してくださっているものである、ということです。ですから、永遠の命は人間の力で勝ち取るものではなく。神の憐みによって受けるものである、ということであります。しかし、その永遠の命を受け取るために、わたしたちには注意することがある、と今日の福音書はイエスの言葉を通して語っているようであります。その注意することは何かを今日は考えていきたいと思います。

「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいのでしょうか」と、ある人がイエスに尋ねます。そして、その問いに対してのイエスの答えが今日の福音書の物語の本筋であります。そうしますと、イエスの答えに真理があることは当然ですが、同時に答えを引き出した問いの中にも何か大切なこと、この物語の真意が隠されていると考えられます。それ故に、何度もその問いを読んでみました。すると、日ごろわたしたちが使うことのない言葉があるのです。それは「受け継ぐには」という言葉であります。一般的に使う「手に入れるには」「受けるには」「与えられるには」ではない言葉であります。何故、ある人は「永遠の命を手に入れるには何をすればいいのですか」と尋ねないのでしょうか。「受け継ぐには」と何故尋ねたのでしょうか。気になりますので、調べてみますと「受け継ぐ」と訳されていますギリシャ語は「クレーロノミア」であります。本来の意味は「嗣業」とか「相続地」という意味であります。「嗣業」という言葉は日本ではあまり使われる言葉ではありません。共同訳聖書の最後にあります付録の 29 頁に「用語解説」がありますが、そこでは「嗣業」を「本来は賜物を意味し、資産、相続財産、特に相続地を指す」と説明されています。このギリシャ語「クレーロノミア」はその言葉が生まれてきた経緯に興味深いものがあります。「クレーロノミア」は「クレーロス＝くじ」と「ノメー＝牧草

地」という言葉が合体されて出来上がっているのです。本来の意味は「土地（牧草地）をくじで分ける」という意味です。イスラエルの 12 の部族がカナンの土地を獲得します。その土地を分割するとき、くじを引いて分配したという民数記 26 章の物語が背景にあります。イスラエルの民は土地の分配を人の力や業績で分けませんでした。くじという神の働きによる方法をもって分配しているのです。ですから、その与えられた土地（嗣業）は王、権力者でさえも奪ってはならないとされています。（列王記上 21 章「ナボトの畑」）もしも、嗣業の土地（神から与えられた土地）の持ち主が落ちぶれて、土地を手放しても、必ず近くの者（親戚・ルツ記）が買い戻さなければなりませんでした。それでもだめでしたら、50 年ごとのヨベルの年には元に戻され、本来の土地の持ち主（嗣業として与えられた者）に　返還されなければならない、という律法がありました。そのイスラエルの法体制は、大土地所有者や権力者が力によって財産を奪っていくということの阻止のためでありました。そして、同時にそのことを通して大切にされていましたのが、「神の物は神に返す」という精神に立ち返ることであったのです。

今日の福音書では、ある人がイエスに「善い先生、永遠の命を嗣業としていただくためにはどうすればいいのですか」と尋ねています。そうしますと、イエスは「神から嗣業として永遠の命をもらいたいなら、あなたが持っているものを神に返しなさい」と言っているのであります。言い換えますと、「まず、神の物を神に返すことによって、神は新しい嗣業（永遠の命）をあなたに与えてくれます」と言っているのです。

金持ちは自分の持っているもの、それが神からの賜物（神の物）とは考えていませんでした。自分が持っているものは自分の力、自分の才能、自分の努力によって獲得したものであり、獲得したもの全ては自分の物と考えていたのであります。ですから、金持ちにとっては自分の持っているものを「神にお返しする」という考えは全く持っていませんでした。イエスは「永遠の命を嗣業として受け取るには何をすればいいのですか」と問うた人に対して、「嗣業として受け取りたいなら、今まで嗣業としていただいていたものを本来の嗣業として扱いなさい」と言っているのです。

平たく言いますと、「神の物を神にお返ししなさい。そうすれば、神は新しい神の物（永遠の命）を与えてくださる」というのです。それができないならば、神は新しい嗣業（永遠の命）をお与えにはならないのです。

それは持っている者（金持ち）には大変なことですし、なかなかできることではありませんでした。ですから、金持ちはイエスの前を悲しみながら立ち去って行ったのであります。しかし、それは金持ちだけの問題ではありません。

わたしたち一人ひとりにも問われていることであります。わたしが持っているものは、決してわたしだけのものではないのであります。すべて、神からいただいたものであり、神の物なのです。神の物であるとするならば、本来は神に返すものなのです。

　ですが、「神の物を神にお返しをする」、その精神を実践することは難しいことであります。しかし、わたしたち教会に属している者はそれが出来ませんので、その精神を忘れないようにと、何度も何度も、繰り返し、繰り返し、訓練しているのであります。それは聖餐式の時に行っています。聖餐式の「奉献」の時に、司祭が「全能の父なる神よ、この「信施」供え物を受け、主のみわざのために用いてください」と祈りますと、そうしますと、会衆は「すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主にささげたのです　アーメン」と応答しています。わたしたちは毎主日、聖餐式の中でそのように祈り、自分の信仰生活をチェックしているのであります。わたしたちが奉献の時にやっていますことは「わたしたちが持っているすべてのものは神の物です。わたしたちはそれをあなたからいただいていますが、そのほんの一部ですがお返ししているだけです」と祈っているのです。その祈りは、神からいただく永遠の命を受けるためには無くてはならないものなのであります。永遠の命は嗣業として、神から与えられるものです。わたしたちが今、与えられているものを、ちゃんとお返ししするという神との関係が出来ない者に、神は新しい永遠の命というものを与えてはくださらないのです。

「神の物を神に返す」という精神を、大切にしながら生きることは、信仰者として大切なことで、重要なことなのであります。そのことを覚えつつ、聖餐式の「奉献」の時に、しっかりと意識しながら信施をささげ祈ってください。

聖餐式を続けてまいりましょう。